

公立小学校教員採用試験倍率最低値2.7倍 質の高い教員確保に懸念？

こんな記事が新聞やテレビで報道されています。来年度から小学校の学級定員が35人となり、学級数の増加に見合う教員の確保が必要となるなかでのことです。

<教員養成学部の改変、再編で教員養成数が大幅に削減された平成10年(1998)>前後

教員養成が多すぎるというので、教育学部に非教員養成課程(例えば、情報教育課程、生涯学習課程など)を文科省主導で作らせ、教員養成系定員約1万人、非教員養成系約6000人にまでしました。私の前任校では情報、生涯だけでは足りないので新たな非教員養成課程を作るよう指示がありました。当時改革委員会委員長をしていた私は、教員養成の削減を最小限に抑えるべく改革案をもって文科省教育大学室と交渉に行きました。

室長は各県の教員需要の見通しから三重県に求められる数を暗示しました。この需要見通しは人口動態調査からはじき出されたものです。三重県教育委員会との話では、35人学級が実現すればたちまち不足するということで予想数を私たちはもっていたので思わず「文科省はあと10年も40人学級を放置するのですか？」と詰め寄ったら室長はとても嫌な顔をして無言でした。財務省の厚い壁に文科省も苦戦していたのだろうと後で反省しました。

<「質の高い教員」の不足はどこからくるのか？>

文科省との折衝過程では「質の高い教員」を確保するためには「採用試験での適正な倍率が必要」ということが語られました。およそ4倍だったと記憶しています。小学校教員はそのために課程認定された大学・学部でしか養成できないため中・高の教員よりももともと分母が小さく設定されています。2005年の「規制緩和」以来大手私立大学が教員養成学部設置に乗り出し、国公立の定員減をカバーする形になりましたが、それでも2.7倍程度でとどまっています。教員志望者数の減少の原因は何なのでしょう？

①学校現場の状況に学生は敏感

かつて中学校で校内暴力が多発した頃、中学校教員養成課程の学生が小学校教員の採用試験にまわるという現象がみられました。この間、保護者によるクレーム(中には無理難題要求=イチャモンと呼ばれるものもあり社会問題化した)が「モンスターペアレント」としてマスコミでも取り上げられました。無理難題要求を「イチャモン」研究として学校づくりの観点から研究していた大阪大学の小野田正利教授は3000件に及ぶ事例を分析したうえで以下のような「定理」をあげています。

小野田の定理①”イチャモンは時と人を選ばない”

小野田の定理②”教職員が子どもと触れ合う時間が減少すればするほど、イチャモンは反比例してふえる” (小野田著『悲鳴をあげる学校』2006年旬報社 pp.102-107)

小野田教授の研究はモンスターペアレントとして保護者をラベリングするのではなく、イチャモンの背景にある保護者の要求を見据え、その要求を「学校と保護者のいい関係づくり」のためにいかに活かしていくのかという観点に貫かれています。小野田教授は言います。

ですから私は、一見するとイチャモンへとつながるかもしれない「突っ込み」に対しても、必ずしも批判的あるいは否定的には見ていません。じつは、そこにこそ学校と保護者あるいは地域住民が「つながるチャンス」も存在しているからです。(同書69頁)

* イチャモンを「つながるチャンス」に変えた多くの事例をここでは紹介できません。ぜひ小野田教授の著書をお読みください。(研究所に3冊あります。)

* 小野田教授の研究は医療機関へのイチャモン事例の分析も行っています。

②ブラック校則、ブラック職場

SNS上に<Change org.>というサイトがあります。いわゆるネット署名のサイトです。私は「もりかけ」問題に関連して自死した赤木俊夫さんの真相究明を求める署名に賛同して以来閲覧していますが、最近学校に関わる署名がいくつも提起されるようになりました。

「はだかの内科検診は必要？」

「【令和の校則】制服を着ない自由はありますか？制服は強制力のない「標準服」にして行き過ぎた指導に苦しむ生徒を救いたい！」

「義務教育で精神疾患を教えて偏見を無くしてほしい」

「中学生に避妊について教えるのは不適切なのでしょうか？」(東京都足立区問題に関わって)

この他にも「男子生徒の心を惑わすポニーテール禁止の校則は不当」(皆さんこの校則を理解できますか?)といったものもあったと記憶しています。また、非正規教員の待遇改善や正規化問題はFBのグループが作られています。また、「看護師の日雇い派遣に反対します」や保健師の増員要求にも声があがっています。

ネット上では小学校の体育の授業で下着の着用を認めない指導への疑問や、「白を基本とした下着着用」に違反した生徒が脱ぐように指導された不当性を訴えるものまで、実に多くの声があがっています。もちろん、これらの校則・指導には学校なりの理由が説明されていますが、保護者や児童・生徒の納得が得られているとは言えないようです。

こうしたブラック校則とそれを守るように務める教職員の苦労、際限ない勤務状況としてのブラック職場が全体として「教員志望」への意欲を低下させているという指摘もあります。

再び学校は厳しい視線にさらされています。これまでの<学校バッシング、教職員バッシング>がそうであったように、これらの批判は教育政策を推進するための「スケープゴート」を作るために利用されていく危険性をもっています。(私見ですが、教育のICT化やデジタル教科書導入、某県の英語教員採用試験をTOEIC730点と面接のみにするといった動向も気になります。)生徒、保護者、地域住民との連携をとりながら「学校づくり」を進めていくことが一層大切になっていると感じます。

*『21世紀型学び』第10号に紹介されていた誠信高校の三者(四者)フォーラムの報告、南山中高男子部の「性に関する調査」の報告、日福付属高校の探求「GFS」など興味深く読ませていただきました。本校でも読後感想会がもてたらよいですね。

「コロナ世代」という言葉がささやかれ始めています。病院実習を十分に経験できなかった看護系学生や教育実習が十分できなかった教員養成系学生に対する不安を表す言葉のようです。かつて私たちは「大学紛争世代」と呼ばれ、最近では「ゆとり教育世代」という言葉もあり、他の世代から揶揄されたことがあります。しかし、こんな時代にそれぞれの道を歩もうとする若者には厳しくても温かい手を差し伸べる社会、職場であってほしいと思います。同時に、この世代は「コロナ世代」としての独特の感性で未来を切り拓いてくれるものと信じています。

*最近、テレビドラマで「青のSP」や「ここは今から倫理です」がドラマ仕立てながら学校や保護者の問題を扱っていて興味深く視聴しました。医療現場を扱った「神様のカルテ」は学校の問題をだぶらせ考えさせられながら観ています。